

湖と生きた

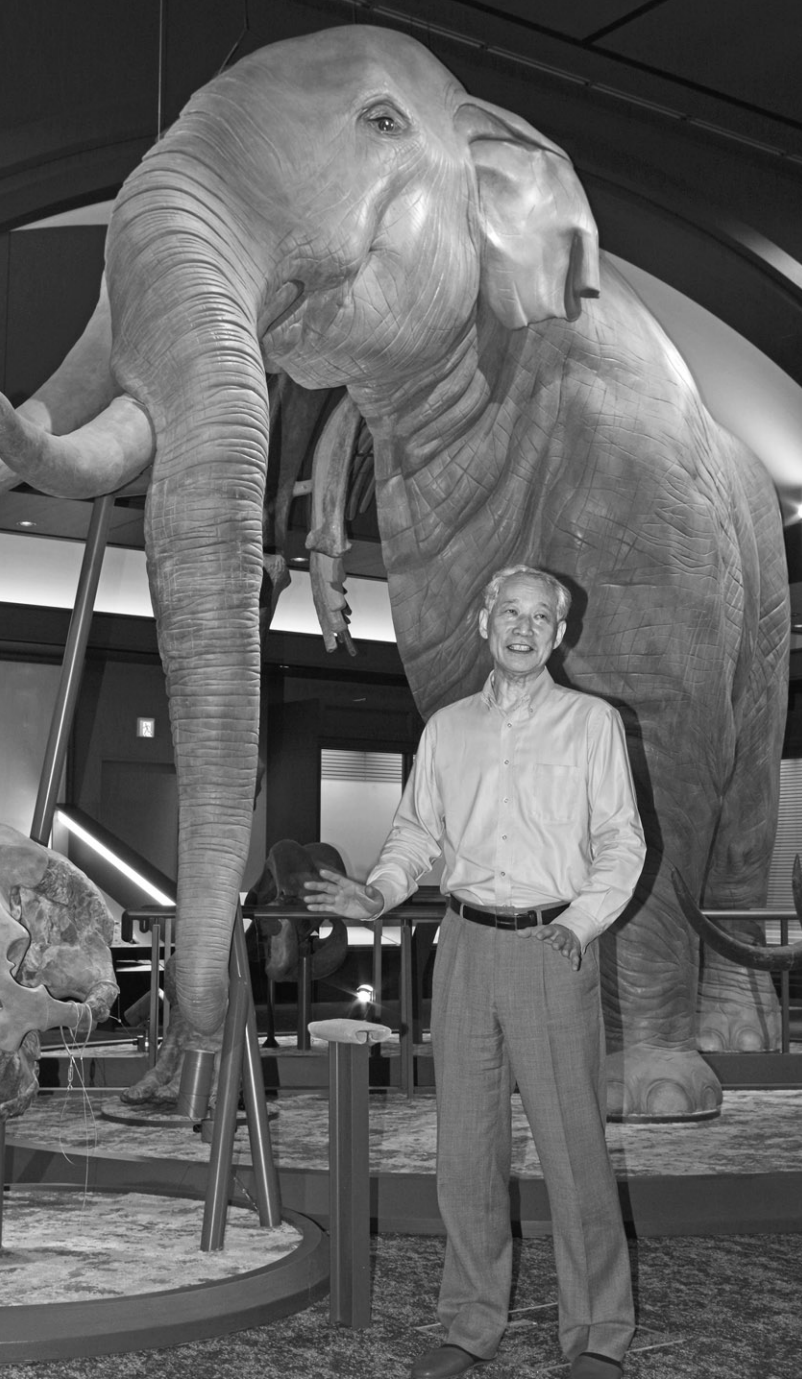
琵琶湖博物館館長

高橋 啓一さん

身の回りのおもしろさ、立ち止まって考える

このほど3期6年をかけた全面リニューアルが完成した琵琶湖博物館。現館長の高橋啓一さん(63)は開設準備段階から30年、博物館と歩み続けてきた。古脊椎動物学の研究者で、発掘され

た化石から、琵琶湖のほとりにゾウやワニがいた時代、その変遷、400万年の湖の姿をひもといてきた。ご自身の歩みから見えた世界、そして、どんな博物館を目指すのかを伺った。



たかはし・けいいち

- 1957年 福岡県豊前市生まれ。父の転勤に伴い関西中心に各地を経験。
- 1975年 日本大学文理学部応用地学科入学。野尻湖発掘調査団の友の会参加
- 1976年 東京・日本橋の発掘現場でナウマンゾウの化石に出会う
- 1979年 大学卒業
- 1980年 京都大学理学部研修員
- 1981～1990年 日本歯科大学新潟歯学部(助手～講師)
- 1990～1996年 滋賀県教育委員会で開設準備
- 1996～2017年 滋賀県立琵琶湖博物館(主任学芸員、研究部長、事業部長、副館長などを歴任)
- 2017～2018年 滋賀県審議員(琵琶湖博物館副館長)
- 2019年4月～ 琵琶湖博物館館長

歯学博士(1989年、日本歯科大学) 理学博士(2004年、日本大学)



地殻変動と気候変動、400万年の琵琶湖の歴史に誘うシンボルが、A展示室の巨大なツダンスキーゾウの半骨半身レプリカだ。肩の高さ4メートル、物園のゾウの2倍近いその足元に高橋さんの母がいる雌のナウマンゾウの頭骨化石レプリカ。1976年、東京・日本橋の地下22階で見つかった。

高橋 これが大学1年生の冬、初めて出会ったナウマンゾウの化石。研究者としての私を育ててくれた「母」です。

子ども時代から石や恐竜が好きで、小学生のとき、「石のポケット図鑑」を買ってもらい、駐車場で石を観察したのを覚えています。生物と地学がミックスした古生物・化石の勉強がしたくて、日本大学応用地学科に進みました。入学してみると日大には古生物の先生はいなくて、東大の先生が教えに来ていただけでした。しかも、日大はマスプロ教育でひとりひとりの指導などできない。でも、かわりに何をやってもいい。私にはこれがよかったです。

1年生のある日、大学の研究室に1枚のピラが貼られていた。「野尻湖発掘調査団友の会」の募集。1962年に始まり現在も続く長野県野尻湖の発掘の友の会ができた年でした。人類考古、花粉……さまざまなグループの中から「哺乳類化石」を選び、合宿に参加しました。

直後、ラッキーなことに東京・日本橋の地下

鉄工事現場で3体のナウマンゾウの骨が出て、合宿参加者に発掘のお誘いが来た。地下22階で対面した一体が「母」でした。そのクリーニング作業はちょうど春休み期間。暇なので全日程行ける。希望者の中でそんな人間は私だけ。じゃあ、君、リーダーねという話になり、参加者の日程調整から実務指導、作業後の記録まで担った。ついには大学2年生で学会発表をすることになった。「日本地質学会申し込み中」という形で、自信になりました。

骨の化石をやりたいという思いと偶然が、私に研究者の道を開いてくれた。思いだけでかなうわけではないけれど、思っているのとそれがチャンスかわかる。化石をとろうと思わなければ、化石がみつからないのと同じです。思っているから、人生の岐路で「こっちへ行こう」と見える。

館長になってから出会う人たちが違ってきて、また違うところが見えてくる。大学に入ってからこそ1枚のピラが見え、ピラに書いたからこそまた次のものが見えた。行ける場所が広がっていく。そうやって自分で出会いをつくっていくんでしょかね。気づかない間に。意識して登るわけではないけれど、ひとつ上がつてみるとそこにひとつ平原が広がっているって感じ。上じゃなくて横に行ってもいいんですよ。前はすっかり向いていて行き詰ったら、後ろ

を振り向いたらいい。そこに別の道が広がっている。あまり学校に行けない子にも、その子の学校に行けない理由がある。もっと好きなことをどんどんやったらいいのになあと思うんですね。好きなことをやっていると本当にやらなければいけない勉強もわかってくる。学校で勉強させるのは平均的な人を作るためにすぎないので。

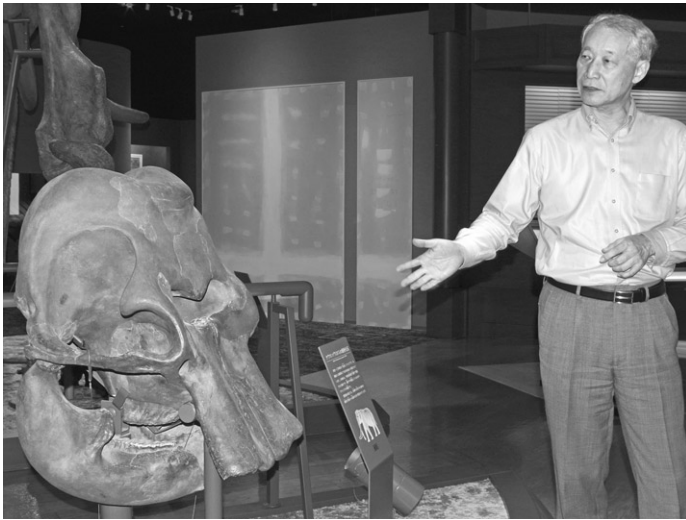
大学では授業に出ずソフトボールに打ち込み、もっぱら野尻湖発掘で研究者たちから学んだという高橋さん。卒業後は野尻湖合宿で出会った京都大学亀井節夫教授の研究室で1年学び、その後、日本歯科大学新潟歯学部解剖学教室で10年働いた。

高橋 化石は生きている間は生物、死んだら堆積物として地質学の対象。日大では地質学は学べたが、できなかった生物の勉強がしなかった。ナウマンゾウ命名者の横山次郎先生もいた。京大は文献史料の宝庫、1年間1日も休まず文献を集めた後、実際の骨から「生物」をみるこができるようになった。骨にどう筋肉がつくのか知りたいと、解剖学教室に就職した。

10年たったある夜、京大でお世話になった先生から「滋賀に博物館ができる」という電話がかかってきた。大学卒業時になりたかった学芸員。「行く」と即決しました。ただ、公務員試

験の対策本を開いても一般常識がまったたくわからない。鉛筆に数字を書いて転がし続けて(笑)、開設準備室に採用されました。

当時、博物館用に収集されていた資料は「1988年に愛知川で見つかった足跡化石」の実物とレプリカだけ。こんなでないの!とびっくりした。でも、滋賀には地域の人々の長く厚い収集の蓄積があった。その寄贈を受け、さらに準備期間6年の調査・収集を続けて博物館ができました。研究は長い間の積み重ねがあつ



研究者として育ててくれた「母」。1976年発掘されたナウマンゾウの化石レプリカと。

て、次の人がさらにその上に少しずつ重ねていってできる。隣の領域の学問も発達しないと、自分の学問も行き詰ります。

琵琶湖博物館の理念は「この地域こそが博物館」だ。

高橋 博物館ができた意味はとても大きい。それまでは滋賀で収集されたものも京大や国立博物館の研究者にみもらっていた。するとモノも行ってしまふ。博物館ができて、モノが留まると、ここでみてもらう循環が生まれる。建物だけあつてもだめで、モノ、人がいて成り立つのが博物館です。加えてお金もあるといいですが、博物館は「モノ(展示)と入館者数」といった「見えるところ」だけで評価されがちですが、それは機能の4分の1くらい。収集し調査・研究し、地域の人と一緒に未来につないでいく。見えないところに力がある。人が大切です。

琵琶湖博物館の理念は「この地域こそが博物館」。博物館イコール建物ではありません。この地域の面白いところへ訪ねていく。この地域の人が調べてそこへ人がくる。主役は地域の人たち。博物館は中心でなく、ひとつの拠点です。情報と手段を持つ私たち学芸員が「わかる」お手伝いをする。だれもが、自然・歴史・文化を調べる楽しさに気づき、自分で調べたことを解析して発信してほしい。



博物館に携わって30年、来館者の目と研究心に支えられていると。つ。

高橋 実は準備室に来たときは、事務仕事が多く勉強もできない環境に「やめてやる！」と思っていました。それから30年、まだ残っているのが不思議です。

続ける支えになったのは、博物館に来る人たちの目。「知りたい」「学びたい」とらんならしている。お手伝いして一緒に何かできる楽しさがある。

研究というのは知りたいと思っている人ならだれでもできます。技術・知識は必要だけれど、プロがやるものという枠があるわけではない。今、私はナウマンゾウの秘密を調べたいと

いう静岡県浜松市の小学生と毎月文通しています。3年生のときに私の講演を聞いて質問をくれた。2年間、24通続いています。インターネットですべて調べるのではなく、人に会って話を聞き、発掘現場にでかけ自分の足で調べた研究成果を送ってきてくれる。私も論文をそのまま送っています。先日、「先

生

の論文を1年後に読み返したら、前よりわかった」と手紙をくれた。必要なのは子ども向けにやさしくしゃべることではなく、本当のことを伝えることだと思う。本当のことは伝わる。この子は調べて、わからないことを今も質問してくれます。研究の半分は質問をつくること。質問ができれば半分研究はできています。化石も、ただ見ているだけでは何も語りかけてくれない。こちらが適切な問いを投げかけたとき、初めて過去にあったことを物語ってくれます。

だれの身の回りにもいっぱいおもしろいことがある。おもしろい対象は人それぞれ違うと思いますが、それを自分で考えてみる。琵琶湖が汚れていると聞いたら、「きたないんだ」ですますのか、実際に行つて自分の目で確かめるのか。足を運ばばいろんなことを感じる。そして、立ち止まって考える人になる。そのきっかけのひとつとして、化石や歴史があるのです。

博物館に来た人が、驚きや感動があつて、知らなかったものに気づく、自分のまわりで見たい、調べてみたいと思ってもらえる、そんな展示や活動を続けていきたいと思つています。

滋賀は琵琶湖があるので、真ん中にもものなく、大きな空がいつもある。これは本当にいい。地域の人々が主役となつて、地域の活動が有機的につながる「地域こそが博物館」は、そんな滋賀の形だからこそ生まれるのかもしれないね。

自身も今なお毎朝研究を続けている。

高橋 毎朝3時か4時に起きて出勤前に研究